

嵯峨野さみがの

〔三代実録じつろく日、元慶六年十二月廿一日己未、勅して山城国葛野郡嵯峨野は旧田獵を制せず今新に禁を加ふ、

樵夫牧豎の外鷹を放ち兎を追ふ事をゆるさず云々。都てさが野はいにしへより上皇の仙居雲客せんきよんかくの別荘かずくありて、名所旧趾数ふるに際限なし。されども名あつて伝記詳ならざるはしるさず、多くは前編に見へたり。嵯峨野とは北嵯峨、上嵯峨かみさ、下嵯峨の惣名なり。今は民家建つゞきて野とさす所多くはなし、いにしへより野山原とも和歌に詠ず〕

新 古 さがの山千代ちよのふる道跡とめて又露分る望月の駒 定 家

新 続 古 夕暮は秋のさが野の鹿の音に山本深き露ぞこぼる、 前太政大臣忠定

玉 吟 むかへこしすがたも月もさやかにて浮世をてらすさがの山本 家 隆

兼明親王亭かねあきらしんわうのてい

〔今野いまのの宮みやの南に旧蹟あり。此親王は延喜帝えんぎてい第十六の皇子にて、文学詩賦に達したまふ、右大臣に任

ず、此地に閑棲の起は貞元二年の夏、関白兼道公くわんぱくかねみちのはからひにてかの官職をとめて中務卿なかつかさに任ず。頼忠よりたを左大臣に任じ、宇多帝うだていの孫源雅信みなもとのみまさのぶを右大臣とす、兼明親王かねあきらは今上円融帝きんじやうえんゆうていの叔父なるゆゑ、関白兼通かねみち忌悪いみんで右大臣の権を奪ふなり。又村上帝むらかみていの皇子中務卿具平親王ともひらも詩文に達し給ふ故に、兼明親王かねあきらをば前中書王ぜんちゆうしようわうと称し、具平親王ともひらをば後中書王ちゆうしようわうと

号るなり〕

かめのをのたき
亀尾瀧 「いにしへ亀山の中にあり、山崩れ溪埋れ水脈きれて今は絶てなし。此山の麓に後嵯峨院、後又亀山院も

こゝに仙居し給ふ。

著聞集云 　むかしたち帰て御政めでたく御心もちひも万たくみにおはしますあまり　大井河の山庄を仙居にうつして

おはします。造営の事は権大納言実雄卿のさたとぞ聞えし。水の心ばへ山のけしきめづらかにおもしろき所がらな

り、東は広隆寺、常盤の杜、西は前中書王のふるき跡、小倉山の麓、わざと山水をたゝへざれども自然の勝地なり、

南は大井河遙にながれて、法輪寺のはし斜なり。かゝるはこやの山をしめたまふ御事はこの院の御時なり。

増鏡云　嵯峨亀山の麓、大井川の北の岸にあたりてゆゝしき院をつくらせ給へる。小倉山の梢、戸灘瀬の瀧もさなが

ら御垣の内に見へて、わざとつくろはぬ千載もおのづから情をくはへたり。所がらいみじき絵師といふとも筆に及

びがたし、宸殿のならびにいぬるにあたりて、西に薬草院東に如来寿量院などいふもあり。橘の太後のむかし立

られし檀林寺といひしも、今は破壊して石ずゑばかりに成たれば、其跡に浄金剛院といふ御堂をたてさせたまへる

に、道覚上人を長老になされて浄土宗をおかる。天王寺の金堂をうつさせたまひて多宝院とかや立られたる、川に

のぞみてざしき殿つくらる。大多勝院と聞ゆるはしんでんの御持仏すゑたてまつらせ給へり云々。

亀山の仙洞に吉野の山の桜をあまたうゑ侍りしが、

花のさきけるを見て

続古今集

春毎に思ひやられしみよしの、花はけふこそ宿に咲けれ

太上天皇

徒然草云

亀山院池に大井河に水まかせられんとて、大井の土民に仰て水車をつくらせられたり。おほくのあしを給

ふて、数日にいとなみ出してかけたりけるに、おほかためぐらざりければ、とくなほしけれ共つひにまはらでい
たづらにたてりけり。扱宇治の里人をめして拵させければ、やすらかにいひてまゐらせたりけるが、思ふやうにめ
ぐりて水をくみ入る事めでたかり」